

仏教が排除したもう一つの「輪廻説」

——父と息子の一一致をめぐつて——

松 潤 誠 達

古代よりインドの宗教や思想は、いずれの場合であつても、「輪廻思想」を前提としていると考えられる。それは、いわゆる六師外道の中で業にもとづく果報の存在を否定し、したがつて輪廻を否定したブーラナ・カッサバ(Pūrana, Kassapa-)の場合でも、唯物論的な思想をとなえたパクダ・カッチャーヤナ(Pakudha, Kaccayana-)の場合でも、ニヒリズム的な考え方を抱いていたというアジタ・ケーサカンバルイン(Ajita, Kesakambalin-)に関しても、輪廻を否定したという意味において、輪廻を前提としていると言ひ得るであろう。

古代インドにおいて輪廻思想が明確な形で記されるの

は「ウパニシャッド(upanisad)」にはじまると言えるであろう⁽¹⁾。これは「ヴェーダ(veda-)」と称するインド最古の文献の最後尾を構成し、「ヴェーダ」が前提とする祭祀と直接・間接にかかわりあつた内容を持つてゐる。その作成された時期はほぼ仏教やジャイナ教の成立時期と重なり、したがつて輪廻思想の成立時期が暗にここに読みとれるようにも見える。しかし「ウパニシャッド」の輪廻思想とシュラマナ(Sramana)たちのそれとの関係が因果的に説明しうるか否かは定かではない。

いざれにせよ輪廻は邪悪なものであつて、人びとはそれからの脱却すなわち解脱を求めた。輪廻における生存

はしたがつて否定されるべきものであつた。個人が、永遠に反復する生存の状態を超えることを通して、不死であるいは最も確固たる「生」を勝ち取るといふことが、輪廻説の背景をなす究極的な理想であつた。

これに反して、個人としての存在を永遠に継続させるこことによつて、死を克服し不死を確立しようとする思想もまた古代インドには存在した。文献に現れるといふ点のみから見るならば、この思想は輪廻説よりもさらに古い起源を持つてゐる。しかし輪廻説が「ウパニシャッド」においていわゆる五火二道説⁽²⁾のように、また仏教の六道やジャイナ教の世界観のように体系化されたのに對し、この思想は常に極めて素朴な形のままに留まり、決して体系を整えることはなかつた。

個人としての存在を永遠に継続させることによつて不死が確立され得るとするこの思想を、輪廻説に対しても便宜上「相続説」と呼ぶことにしよう。

「ヴェーダ」における相続説については、筆者はすでに他の機会に論じた⁽³⁾。ここにそれを再び述べる必要はないので、その骨子のみを簡単に記しておこう。

父親は、かれに息子が生まれると、不死(amṛtavatva-)を得ることができる。父親は胎児として妻の胎内に入り、かれ自身の息子としてかれの妻から生まれる。したがつて死を克服し不死を得るために手段は、父親と息子との完全な一致である。それであるからこそ、息子を得ることは父にとって不可欠である。父と息子との完全な一致が実現するためには、妻なし母の介在は許されない。あるいは妻なし母の役割は單なる「生成の場(abhūti)」とされる。換言すれば、超自然的な誕生によつてのみ「死」は克服される。しかし超自然的な誕生は非日常的な手段、すなわち超絶的な力ないしメカニズムの介在があつてはじめて可能となる。

この論において検討を加えようとする問題は、このようないく「ウパニシャッド」以前から現れている相続説が仏教文献においていかなる形で、またいかなる意味を表明しつつ現れるかといふことにほかならない。輪廻をも含

む「苦」からの脱却を説く仏教は、特に初期において

datta.) 王が支配していたとか、苦難はプローヒタ

(⁽⁶⁾

は、父と息子の完全な一致を通しての不死の獲得を奨励するどんか、修行者の場合は出家することが不可欠である。その意味で相続説は仏教の思想とは互に相容れない内容を持っている。それにもかかわらず相続説は見えがくれに仏典の中からその姿を現していくのも事実である。仏典に現れる相続説を検討するに際してとりあえず「ジャータカ (Jātaka-)」を資料として選択する」といふよう。言うまでもなく「ジャータカ」も釋尊の輪廻転生をテーマとしたものであって、その主題の上からは相続説とは矛盾している。

JJの相続説が実際に輪廻説を前提とした「ジャータカ」に存在することを、まず実例をもつて示してみよう。その最も適切な例は『ウッダーラカ・ジャータカ』⁽⁵⁾である。それは次のような説話上のアウトラインを持つところ。

バナーナ (Barañāsi-) やナトマダッタ (Brahma-

行者たちにみせかけの苦行を実行させた。王は苦行者に満足して詩節をもつてウッダーラカに問い合わせた。プローヒタは王がだまされているのに気づいて、詩節をとなえて王をたしなめた。ウッダーラカは父であるプローヒタと問答し、かなわぬと知りて、みずからプローヒタの息子であることを詩節によって名乗った。プローヒタは自分の指環によつてウッダーラカが実子であることを知った。プローヒタとウッダーラカは「バラモンとはいかなゐのか」をめぐらして詩節によつて論議を交し、ついにウッダーラカは言葉に窮して沈黙した。ソレでプローヒタは王に願つてウッダーラカを副プローヒタ (upapurohita-) とし、他の苦行者たちを王の従者 (sevaka-) とした。ウッダーラカは現在の人を欺く出家修行者 (kuhakabhiikkhu-) であり、王はアーナンダ (Ānanda-) であり、菩薩こそプローヒタであった。

JJの「ジャータカ」の中でも、ウッダーラカがプローヒタに対し自らが実子であることを打ちあける詩節が実は

逢ふ、かの女は妊娠した。かの女は、生まれる子に祖父 (ayyaka-) の名を付けたいと仰つたが、かれはウッダーラ (Uddāla-) といふ木に因んで子の名をウッダーラカ (Uddalaka-) とせよと言ふ。かれの印形の指環 (angulimuddikā) を残し、「おほ男の子であつたが、かれが年になると私に見せてほしく」と言ふ置いて去つた。

やがて男の子が生まれ、ウッダーラカと名づけられた。かれが年になると、指環を持ってタッカシラ (Takkasiilā-) 行き師のあとで技芸を学んだ。ある日か一群の苦行者 (tapasagana-) に逢ふ、かれらの仲間に入つて、ついに師の地位 (acariyatthāna-) を得た。かれは苦行者たちをひきつれてベナーレスに行乞に行き、人々から施物を得た。

有徳の苦行者がやつて来たという人びとの評判を聞いて、王はプローヒタをともなつてウッダーラカに逢ふに来た。ウッダーラカは王の尊敬を得ようとして苦

重要である。しかしその詩節は読みの上で問題があり、同時に難解な語を含んでいる。モヤペーリ語による本文を擧げてみよう。

Bhaccā mātā pitā bandhū, yena jāto sa yeva so, Uddalako ahan bhoto sothiyākula vāmāsako.

JJの詩節によつて、mātā pitā はだれのね? フ・アウスベル (V. Faubusell) は mātāpitā と複合語として読んでくる。その上に頭の bhaccā が問題である。実はJJの詩節の前半 (Bhaccā おも yeva so おも) はサンスクリット語の大叙事詩事 (マハーバーラタ (Mahābhārata-)) とペタナルな詩節があつ、それが mātā pitū putro yena jāto sa eva sali.

一方 bhaccā については註は入れを bhr- と翻訳してある。JJの「ジャータカ」は表すは註が、mātāpitā は複合語に解してあるが、ペタナルな詩語へ、ペーリ語によるの詩節のコントラストとかの見て、mātā pitā 大切な方が良もそらである。

一方 bhaccā は bhr- では註はないが、bhār- と翻訳して Gerundive と取つてある。しかし、サンスクリットのペタナル文を尊重するならば、その語はサンスクリット

語 bhastrā のパラークリット形とも考えられる。⁽¹⁹⁾ なおそのほか、パラークリット形 bhacca- の女性形、アルダマーガディー(Ardhamāgadhi) 語 bhajā- を期待する形⁽²⁰⁾などと想定するのも不可能ではない。今は、一応サンスクリットのペラルの文を第一と考へて、次のようにこの詩節を翻訳しておこう。

「母親は「水を運ぶ」皮袋であり、肉親は父親「のみ」である。なぜならばかれ（＝父親）は生まれたかれ（＝息子）だからである。

る。「わたくしはあなたの「息子である」ウツダーラカであり、学識高き「バラモン」の家系に属するものであ

」の詩篇の bhaccā- भज्जा- (Desī) と並べて「妹の娘」と解す。これはコントラクトの上からもさわれば

が唐突であり、アルタマーラテイ語の *Dinajla* を予想するのもコンテクスト上一見奇異ではあるが、この詩節をめぐる状況が、息子が目の前にいる人物が父親である

すでに述べたことがあるが、簡単にこの「ジャーダカ」⁽¹⁶⁾のアウトラインを記した上で、そのポイントのみを記しておきたい。

ルース(Reṇu)には息子がなかった。かれの宮廷にマハーラッキタ(Mahārakkhita)という名の苦行者が五百人の苦行者とともに雨期を過していた。雨期が終ったとき、かれら苦行者は宮廷を辞したが、その途中でマハーラッキタは、「王の第一王妃が神の子(deva-putta-)が次の日の朝に懷妊すれどあらう」と叫んだ。これを聞くとディッバチャックカ(Dibbacakkhu-ka-)という苦行者は病氣といつわってルース王の宮廷にも入り、王に対し「王に息子が生まれるであらう」と告げた。王は大へこ喜んでかひを「重く思ふ」、か

れに宮廷に滞在するよう求めた。やがてソーマナッサ(*Somanassa*)という王子が誕生した。王子が七歳になつたときかれはディンバチャッカが野菜を栽培してこれを売り、莫大な利益を得ているのを知り、かれを非難した。ディンバチャッカは自らの窮地から逃げ

ことを自ら告げる場面であることを考慮すれば、大筋からあまりに荒唐無稽に過ぎるとも断言しえないのである。

るため、奸計をめぐらし、王をあざむいてソーマナツサを殺させようとした。ソーマナツサは事実を説明して苦行者の嘘をあばいたが、王の愚かさに落胆し、両親の制止するのも聞かいたれど苦行者となつてピマーラヤに去つた。神格 (devatā-) にかしづかれたかれはヴィッサカンマ (Vissakamma-) 神の作った草庵で修行生活を送り、ブラフマンの世界に達した (brahm-alokūpaga-)。邪悪なディッバチャックカは殺された。ソーマナツサは前生のブッダ (Buddha-) であり、かれの母親はマハーマーヤー (Mahamayā-) であり、マハーラツキタはサーリップutta (Sāriputta-) であった。またデイツバチャックカはデーヴアダッタ (Devadatta-) であった。

すべての「ジャータカ」がそうであるように、ここで
も輪廻説がストーリーの表面に顕著に現れていて、それ
はこの結論部分の示すとおりである。しかし「ソーマナ
ッサ・ジャータカ」の特徴は、息子のない父親がソーマ
ナッサという息子を獲得しながら、ついに離別に導かれ

るという点である。そこには父と息子との一致は著しく強調されることがなく、むしろ両者の離別に焦点がしづらされている。それは主人公の性格によるものであって、前生のブッダ(=ソーマナッサ)の世俗からの出離が仏教の理想である解脱への条件として強調されていることにはならない。実は仏教の説話の中にはこの類のものが数多く含まれている。

一方、相続説は一見したといふストーリーの裏面に追いやられてはいるものの、ソーマナッサの誕生といふいわば超自然的な誕生の中に凝縮されて示されていると言えよう。何故かの誕生が超自然的であるか。それは、苦行者の予言という超絶的な力の介在によつて成立したからである。しかもその超絶的な力としての苦行者の予言はアンビヴァレントな性質を持つものとして与えられている。すなわち善良な苦行者であるマヘーラッキタの予言と邪悪な苦行者であるティンバチャヤッカの予言という対照性がそれである。ハーヒタに苦行者の予言の超絶性を見ることができる。

「ジャータカ」における相続説のほとんどは前述の『ハ

ーマナッサ・ジャータカ』のパターンを通じている。その場合に、父と息子との一致、ないし、息子の超自然的な誕生を実現する超絶的な力は種々の形をとつて現れる。その極端な例を次に挙げてみよう。それは『ハッテイペーラ・ジャータカ(Hattipāla-jātaka)⁽¹⁷⁾』である。「ジャータカ」としては長編に属するものであるのや、筆者の主論に相当する部分のみを抽出して記そう。

プローヒタは、父親がいないにもかかわらず七人の子を持つた女に、ニグローダ樹に住む神格(nigrodhe adhivatthadevata)に願うと子が得られるなどを教えられた。プローヒタは六日にわたりてその樹神(rukkhadevata)を強迫した。恐れた樹神は四人の大「天」⁽¹⁸⁾(catur-, mahārāja-)に助力を求めたが無力ないとを

知り、二十八のヤッカの将軍(athavasatiyakkhasenapati-)を訪れ、ついにサッカ(Sakka, 帝釋天)に助力を求めた。サッカは四人の神の子(devaputta-)を見つけ出し、かれらをプローヒタの子とする約束した。ただし神の子たちは、若い時に自ら出家することを条件として求めた。七日目にやつて来たプローヒタに樹神はその旨を伝えた。やがてプローヒタにハントイペーラ(Hattipāla-)以下の四人の息子が次々に生まれた。王とプローヒタは四人の息子が出家するのを恐れて、出家者を近づけず、まずハントイペーラを王位につけようとしたがかれはそれを振り切つて出家してしまった。他の三人の弟も同様であった。ついに出家の意義を知つて、王もプローヒタも王妃も、その他の七人の王もそれぞれ出家した。

ジャータカの別離にかわりて、ここでは全員の出家が強調される。父が二重のイメージで現れる点、息子の数、結果の出家の点で、この「ジャータカ」は『ソーマナッサ・ジャータカ』とかなりの差異があるよう見えるが、「子のない親→息子の超自然的な誕生→息子の出離」という枠組から見るならば、この二つの「ジャータカ」は同一パターンであると言えよう。

なお、王とプローヒタとは古来たがいに補足的な関係にあり、たがいに表裏一体をなすことが明白である。⁽¹⁸⁾この「ジャータカ」の例もその一環であると言えよう。

同じく子のない人にサッカが息子の超自然的な誕生を実現させ、しかも息子は出家するというタイプのストーリーは、「ジャータカ」の中に散見され得る。すなわち、『ベルチ・ジャータカ(Suruci-jātaka⁽¹⁹⁾)』もその一例である。そこでは、ミティラ(Mithilā-)王スルチ(Suruci-)の息子スルチクマーラ(Suruci-kumāra-)はベナーレス王ブラフマダッタカムーラ(Brahmadatta-kumāra-)の娘スマーダー(Sumedha-)と結婚してお子がなく、スマーダ

一による布薩の戒行によってサッカが動かされ、ついにマハーペナーダ (Mahāpanāda) へいう息子が生まれる」ととなる。ペルチ王の息子が同名を持つにも相続説の一つの現れと考えられる。⁽²¹⁾しかしマハーペナーダが徳を積んで天に帰ると、この結論部分のモティーフは出家そのものとは異なり、前述の『ソーマナッサ・ジャータカ』における場合と同様である。

このモティーフは、さるに極端化されると、息子の超自然的な誕生をもたらす超絶的な神的力が変質し、前生のアッダないし戒行の正しい人が受胎可能な時期にある妻 (utunī-) の膚 (nābhi-) に触れる (parā-mṛś-) へ息子が受胎するという表現となるとともに、ストーリーの結末は、父と息子との離別そのものか、それが示唆されるかのいずれかになる。結末部分の解釈については前述のとおりである。

このモティーフがさらに極端化され単純化されると、息子のない親が願つたり、あるいは祈つたりするなどによつて息子を得るという形に帰着するのである。そしてその結末は『ソーマナッサ・ジャータカ』のようだ
ハ

フマンの世界に息子が赴くとそれなり、息子が出家するときれりたり、いずれにせよ出離と多かれ少なかれ関係するといふことなる。

上來検討を加えてきた問題は、仏教文献、とりわけ「ジャータカ」に現れる相続説であった。再びいに述べぬまでもなく、「マハーペナーダ」に顯著に現れる相続説は「ジャータカ」それ自体が前提としている輪廻説とはその意味の上で矛盾するものであった。したがつて「ジャータカ」がその内部に相続説を混入させつつ釈尊の前生を説くことはどうもなおざり自己矛盾の表明にはかならなかつた。今まで検討したように、矛盾を孕ませながらも相続説が「ジャータカ」に現れていたその理由の一つは、「ジャータカ」がその素材を『マハーバーラタ』などの仏教以外文献と共通のストーリーのいくつかを持つてゐることであるとおもふよ。

しかし「ジャータカ」は自らの輪廻説とのような相続説の間の矛盾には確かに気付いてはいたけれども、その矛盾に困惑するのではなく、おこる積極的な解決方法

を導入することによってそれを解消しようとしたにちがいない。その解決方法とは、父と息子の一致の次の局

面に現れる両者の離別であり、父が息子（多くは息子）によるグラフマンの世界への到達などの宗教上の理想の達成であり、出家の実現といふ、ストーリー上のいのつたな結論を導入することにほかならなかつた。それは相続

説の意味論上の否定であり、そのまま輪廻説の肯定であり、同時に輪廻からの脱却に門を開くことによつて達成されたと思われる。

相続説は「ジャータカ」以外の仏教文献にも現れる。その一部分については他の論文（前掲「シヌナハシヒーべーく」と「相続説の意味」）で触れさせておいた。

註

- (1) 拙著『ウペニシャッヂの哲人』（『人類の知的遺産』2、講談社、昭和五五年）一五二ページ以下。
- (2) 拙著、前掲書、二八五一三〇三ページ。
- (3) 拙稿「シヌナハシヒーべー説話の意味」（『大正大学研究紀要』第六七輯、昭和五七年二月、一一一八ページ）
- (4) 千鶴龍祥『改訂増補版、本生經類の思想史的研究、附

(5) V. Fausbøll (ed.): *The Jātaka, together with its Commentary, being Tales of the Anterior Birth of Gotama Buddha*, Vol. IV, 1887, p. 297-304. (Jātaka No. 487).

(6) 飼母本の禁制。

(7) V. Fausbøll (ed.): *op. cit.*, P. 301.

(8) Mahābhārata (Poona Critical Edition) 1, 69, 29 ab.

(9) bhaccā ti mātāpītā ca sesabandhū ca bharitabbā nāma. (V. Fausbøll: *op. cit.*, p. 301) へいのしの解釈は、意味をなさないむけではなまが必ずしもやがて是體であるむせばなる。cf. W. Geiger: *Pāli Literatur und Sprache*, Strassburg, 1916, §199f.

(10) いふや撒塔がなまくねむせばなる。W. Geiger: *op. cit.*, §52, 2. Skt. bhastrā: Pāli bhastā.

(11) Pāiasaddamahapāvano s. v. bhacca. いの場合は Deśi い「妹の子」の意。したがひて bhaccā は「妹の娘」となり。

(12) AMg. bhajā: Skt. bhāryā. 「妻」の意。ただし Pāli bhāriyā.

(13) 相続説のコントラクターにおいて妻と母親を同一視す。

翻譯は、古代ヘンムに存した。したがひて、その意味や
せひやしゆの意味とのみな細々と述べた。

p. 278-312. (Jātaka No. 531).

(21) 話 (14) 参照。

(22) 組本『マターナガ・マヤータカ (Mātaṅga-jātaka)』

V. Fausbøll (ed.) : op. cit., Vol. IV, p. 375-390.

(Jātaka No. 497). 並みに『ホーリ・マヤータカ (Sāma-

jātaka-)』 V. Fausbøll (ed.) : op. cit., p. 68-95. (Jāt-

aka No. 540).

(23) たゞ一組本『カナハ・マヤータカ (Kanha-jātaka-)』

V. Fausbøll (ed.) : op. cit., Vol. IV, p. 6-14. (Jātaka

No. 440). 『ホーリ・マヤータカ (Cullabodhi-

jātaka-)』 V. Fausbøll (ed.) : op. cit., p. 22-27. (Jātaka

No. 443). 『ハーヤ・ト・ト・マ・マヤータカ (Sonananda-

jātaka-)』 V. Fausbøll (ed.) : Vol. V, p. 312-322. (Jātaka No. 532).

(14) ヒンドゥー教の聖書「マターナガ・マヤータカ」の母が生
れられた時に祖父の名を付けて希望する
べく、釋迦說がこの現れであると見えたのである。なぜな
ど、母はやがて持つ娘の本質を洞察する力を持ったのである
が、これは必ずしも夫の名前である。cf. J. Gonda: *Notes on
Names and the Name of God in Ancient India*,
Amsterdam-London, 1970.

(15) V. Fausbøll (ed.) : op. cit., p. 444-454. (Jātaka
No. 505).

(16) 猛龍「ハ・ナ・ト・ク・ハ・ニ・ケ・羅羅・羅羅」ナーヴ・ナーヴ

(17) V. Fausbøll (ed.) : op. cit., Vol. IV, p. 473-491.
(Jātaka No. 509).

(18) ヒンドゥー教の聖書「マターナガ・マヤータカ」の母が生
れられた時に祖父の名を付けて希望する
べく、J. Gonda: 'Purohita', *Selected Studies*, Vol.
II, Leiden, 1975, p. 320-337.

(19) V. Fausbøll (ed.) : op. cit., Vol. IV, p. 314-325.
(Jātaka No. 489).

(20) cf. Mahāpanāda-jātaka. V. Fausbøll (ed.) : op.
cit., Vol. II, p. 331-335. (Jātaka No. 264). 『カナハ
マターナガ・マヤータカ』 V. Fausbøll (ed.) : op. cit.,

(21) おなじく大正大藏經義註